

駿府城公園付近の変動地形と歴史探訪：  
中部支部巡検会報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00026908">https://doi.org/10.14945/00026908</a>

## 中部支部巡検会報告

# 駿府城公園付近の変動地形と歴史探訪

久保田 実

平成29年6月18日、静岡県地学会中部支部の巡検会が静岡市理科同好会と共催で行われた。テーマは駿府城公園付近の変動地形と歴史探訪である。午後1時に安田屋本店に集合、昼食後案内者の塩坂邦雄博士から駿府城公園下の糸魚川—静岡構造線（糸静線）の変動地形を確認し、駿府城の堀の高低差は扇状地地形だけでなく、糸静線による断層が関わっているとの説明があった。

安田屋ご主人からは店と横内川に関する説明を受けた。その後、水落から駿府城外堀に沿って断層による段差を確認。駿府城天守台の発掘現場、駿府城石垣の崩落跡を観察して、午後3時過ぎに解散した。参加者は会員10名、静岡市理科同好会の先生方14名など28名であった。以下に巡検会の様子を報告する。観察コースは図1、地質ダイアグラムは図2を参照。

### ① 安田屋

食後、塩坂邦雄博士から糸魚川—静岡構造線（糸静線）と静岡平野・観察コースの解説があった。約2000万年前にアジア大陸の一部であった日本列島が分離し、落ち込んだ部分に日本海・フォッサマグナ（ラテン語で大きな溝の意味）が誕生した。約1600万年前に日本列島が太平洋側に移動し、約1200万年前には大地が沈み6000m以上の厚い堆積物がたまった。そして約300万年前頃から日本列島は隆起し現在に至っている。このフォッサマグナの西側の境界が糸魚川—静岡構造線であるという。

巡検の3日前に静岡新聞で紹介された清水区の興津川支流で発見された糸静線の新露頭に続く静岡雙葉高校



図1. 駿府城公園付近の観察コース。配付資料より作成

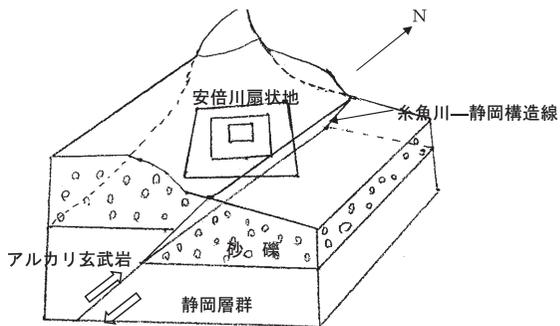


図2. 駿府城公園付近の地質ダイアグラム。配付資料より

断層が、静岡平野の下を通っているという。糸静線はボーリングデータから県立病院の下に存在し、2009年の地震によって駿府城の石垣に崩落箇所を作った。静岡平野は安倍川の扇状地性平野で、河成礫層の厚さは中心部で基盤まで120 m以上になるので（土・高橋，1972），現在までボーリングデータがなく証明はできないが、地表の地形から断層の存在が推定できるという。

安田屋のご主人からは、1866年創業当時からの説明があった。店は駿府城の外堀の東にあり水位が一番低いので、横内川が水落から店の前を流れていた。駿府城築城時は清水の折戸から巴川を上って河合から水落まで資材や米など多くの荷物が運ばれた。江戸時代はさらし屋をしており横内川で布をさらして、近所の紺屋に納めていたという。

いまでも店の前の道路の下の暗渠には横内川が流れている。

## ② 水落の堰（落差 1.0m）

安田屋から水落交差点を右折すると、水落交番のすぐ隣に堰がある（図3）。落差1.0m。外堀で一番低く、細い暗渠から横内川に流れ出ている。



図3. ②水落の堰（落差 1.0m）

## ③ 外堀の石垣崩落箇所（幅約 21m）

外堀に沿ってさらに4分ほど進むと、2009年の地震で崩落した箇所に達する。崩落した箇所は長さ約21m。堀内に堰を作り、水をせき止めて修復工事がなされ、今は元通りになっている（図4）。石垣の上部は整備され、ここだけ桜の巨木がない。糸静線からは離れているが影響を受け崩落したという。



図4. ③外堀の石垣崩落箇所（幅約 21m）

## ④ 東草深の堰（落差 1.2m）

さらに草深橋を越えると数分で2つ目の堰に達する。落差は1.2m。堰の斜面に水が涼しげに流れている（図5）。



図5. ④東草深の堰（落差 1.2m）

## ⑤ 静岡高校前の傾斜

外堀の西草深交差点を右折し、長谷通りから県立静岡高校の正門に達する。正門右側の堀の石垣は2段であるが、道路に沿った堀の端は5段と低くなっている（図6）。正門と堀の端の間を糸静線が通っているという。

⑥ 外堀消防署前の堰 (落差 1.2m)

再び外堀に戻り、緩やかな上りの歩道を3分ほど歩くと、静岡消防団第6分団の建物前の3つ目の堰に達する。落差は1.2m (図7)。水落からの高低差は3.4m になるという。

⑦ 天守台発掘現場

外堀の凱旋橋を左折し、中堀から駿府城跡天守台発掘調査現場に達する。発掘現場では本丸堀の石垣が数十mにわたって現れている (図8)。石垣の大きな砂岩のひび割れは地震と関係があるだろうかと話した。

⑧ 水路

発掘現場から家康像の前を通り、内堀から続く水路を見学した (図9)。従来は内堀と中堀をつなぐこの水路を使って米や食料などを本丸へ船で運んだといわれているが、水路は狭くて断層によって落差が大きいため流れが速かった可能性があり、水路は活用されていなかったらという。

⑨ 中堀県庁裏石垣崩落箇所 (幅約 42m)

内堀から二の丸橋を通り静岡県庁裏の中堀崩落箇所を見学する (図10)。崩落した箇所は長さ約41m。きれいに修復されているが石垣上の松や石垣下のガマなどの植生は途切れている。この辺りは1854年の安政の地震でも崩落したという。



図6. ⑤静岡高校前の傾斜



図7. ⑥外堀消防署前の堰 (落差 1.2m)



図8. ⑦天守台発掘現場での集合写真



図10. ⑨中堀県庁裏の石垣崩落箇所 (幅約 42m)



図9. ⑧水路

#### ⑩ 外堀県庁前崩落箇所（幅約 33m）

静岡県庁の南から大手御門跡を通り，県庁前の大手御門橋脇の崩落箇所を見学する（図 11）．崩落した箇所は長さ約 33m．見学の後，静岡市役所に集まり解散した．

今回の巡検では，従来の駿府城の堀の水位の変化が扇状地地形に由来するというよりは糸静線の断層による段差に由来するという新しい見方で駿府城周辺を観察し，楽しい時間を過ごすことができた．案内の塩坂邦雄博士，安田屋の安田氏に感謝致します．



図 11. ⑩外堀県庁前の石垣崩落箇所（幅約 33m）

#### 引用文献

土 隆一・高橋 豊（1972）：東海地方の沖積海岸平野とその形成過程．地質学論集，7，27-37．